

令和 6 年 9 月 20 日現在

機関番号：17701

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14154

研究課題名（和文）幼い子どもをもつ母親における「育児への感情転換モデル」の実証研究

研究課題名（英文）Research on the emotional transformation model toward childcare among mothers with childhood

研究代表者

金 娟鏡（KIM, Yeonkyeong）

鹿児島大学・法文教育学域教育学系・准教授

研究者番号：20709852

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 800,000円

研究成果の概要（和文）：育児に対する感情は肯定的感情と否定的感情の両方が共存していることが示された。また、否定的感情から肯定的感情へ、肯定的感情から否定的感情へといった両感情の転換の様相を具体的な育児場面との関連から検討した結果、食事・睡眠・清潔などの基本的な生活習慣から安全やルール遵守などの社会的な生活習慣までを含む子どもへのしつけと密接に関連していることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

育児への感情について否定的から肯定的へ、肯定的から否定的へと転換する側面を捉え、具体的な育児場面との関連を明らかにしたことで、近い将来親になりうる若者には育児への具体的な理解を深める効果が期待できるとともに、育児期の母親には具体的な支援を行う際の有効な知見として活用できる。肯定的感情から否定的感情へ変わり、それが過剰になった場合、育児虐待などのリスク要因となるため、どのような育児場面で感情の転換が起こりやすいかを提示した本研究の知見は、児童虐待を予防する資料としても貢献できると考えられる。

研究成果の概要（英文）：It was found that both positive and negative emotions existed regarding childcare. We also examined the changes in both emotions, such as from negative emotions to positive emotions, and from positive emotions to negative emotions, in relation to specific child-rearing situations. The results revealed that emotional changes in childcare are closely related to the discipline provided to children, including basic lifestyle habits such as eating, sleeping, and cleanliness, as well as social habits such as safety and rule-abiding.

研究分野：子ども学および保育学関連

キーワード：育児 感情転換 しつけ

## 1. 研究開始当初の背景

幼い子どもを育てる中で、育児不安やストレスといった育児への否定的感情を訴える母親は、1981年の10.8%から2002年には30.1%と3倍近くにまで急増したことが報告された(厚生労働白書, 2003)。育児への否定的感情は、母親の精神的健康の低下、子どもへの虐待などをもたらすキーワードとして、社会及び研究者から大きな関心を集めてきた。しかし、実際の育児には否定的感情のみならず、育児満足感や充足感といった育児への肯定的感情も共に存在している(Gottfried & Gottfried, 1988; 荒牧・無藤, 2008等)。金(2007)は、国会図書館所蔵の雑誌記事索引検索の邦文データを用いて、幼い子どもをもつ母親が抱く育児への感情を取り上げた論文の動向を探った。その結果、以下の3点が明らかになった。

- (1) 育児への肯定的感情を含んだ総論文数は32件に留まった。一方、同じ時期に育児への否定的感情を含んだ総文献数は386件に上り、肯定的感情の論文の数に比べると約12倍もの差があった。
- (2) 育児への否定的感情を取り上げたものが圧倒的に多く、肯定的感情を取り上げたものはわずかであり、母親の育児への感情として重要であるにもかかわらず、これまで注目されることが少なかった肯定的感情についても積極的に取り上げる必要がある。
- (3) 他方で、二者択一の選択として肯定的感情のみを取り上げるのではなく、肯定的感情と否定的感情をともに取り上げ、それらが相互にどのように関連し、変化するかに着目することで、母親が抱く育児への感情の全体像が解明できると考えられる。しかし、このような視点の先行研究はほとんど見られず、実証研究が急がれる。

筆者は、これまで先行研究の動向を分析し、育児への肯定的感情に焦点を当て研究を行ってきた(金, 2007; 金, 2008; 金・相川, 2011等)。その結果、肯定的感情は母親の精神的健康を促進すること、また、母親を取り巻く育児ネットワークでの支援や規範、比較といった育児ネットワークの様々な機能が肯定的感情と密接に関連していること等が明らかになった。ただし、上記では育児への肯定的感情のみを扱っていたため、肯定的または否定的といった両感情の全体像を解明することまでには至らなかった。そこで、育児への感情の全体像を解明すべく、その構造や相互の転換に着目し、育児の内容や状況を反映した具体的な場面との関連から検討を行うこととした。

## 2. 研究の目的

近年、育児不安やストレスといった母親が抱く育児への否定的感情が大きく取り上げられてきた。一方で、育児の満足感や充足感といった肯定的感情はあまり取り上げられてこなかった点を否めない。育児を行うに当たっては、実際には肯定的感情と否定的感情は共に存在し、相互

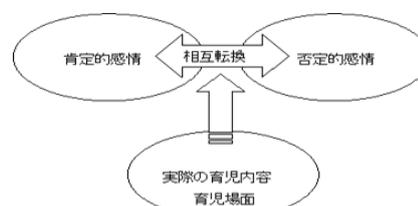


図1. 本研究の概要図

に関連しながら育児への感情を構成していると考えられる。そこで本研究では、母親が抱く育児への感情の全体像を解明すべく、肯定的か否定的かの二者択一ではなく、図1に示すように両感情の構造や相互関連性に着目し、育児支援に有効な資料を提供することを目的とする。

### 3. 研究の方法

上述した目的を達成するために、本研究では主に質問紙法（選択式および自由記述式）による調査を用いた。調査対象者には育児期の母親だけでなく、近い将来親になりうる大学生も含めた。

### 4. 研究成果

- (1) 育児への感情はどのような構造を成しているかについて、育児への感情に係るシソーラス用語を表題または抄録に含んだ先行研究を参考に育児への感情尺度を作成し、検討した。育児期の母親140人を対象に質問紙調査を行った結果、育児への感情は「肯定的感情」喚起と「否定的感情」喚起の2因子で構成されることが明らかになった。
- (2) 育児への感情は、抽象的な概念のもとに生じるものではなく、具体的な育児内容や状況と結びついていると予想される。そのため、育児感情を喚起させる育児の内容や状況について、先行研究を検討した結果、子どもに対するしつけ、すなわち当該社会において望ましいとされる行動様式の習得を促し、社会の一員として自立した生活ができるように導いていく営みにおいて、育児感情との関連がある可能性が示唆された。そこで、食事・睡眠・清潔などの基本的な生活習慣から安全やルール遵守などの社会的な生活習慣までの内容を含む複数場面のシナリオ形式の尺度を作成した。
- (3) 上記(1)の結果を踏まえ、否定的感情から肯定的感情へ、肯定的感情から否定的感情への変化といった両感情の相互転換の様相を詳細に探るため、近い将来親になりうる大学生126名を対象に、Marc Brackettによるムードメーター(2013)を用いて質問紙調査を行った。感情を表す100の言葉のうち、否定的から肯定的へと感情の変化を感じさせる言葉として、「楽しい」「うれしい」「大喜び」「幸せ」「安心している」「希望に満ちた」などが上位を占めていることが明らかになった。一方で、肯定的から否定的へと感情の変化を感じさせる言葉としては、「期待を裏切られた」「失望する」「意気消沈」「悲しい」「うんざりする」「イライラする」「青ざめる」などが上位を占めていることが明らかになった。
- (4) 上記(2)の結果に加え、育児感情を喚起させる育児の内容や状況を含む場面について、近い将来親になりうる大学生125名を対象に自由記述式の質問紙調査を行った。得られたエピソード記述をKH-Coderを用いてテキストマイニングしたところ、否定的から肯定的へと感情の変化を感じさせる育児内容や状況として、「子どもの成長」「食事などの基本的な生活習慣での良い変化」などが挙げられていた。その反面、肯定的から否定的へと感情の変化を感じさせる育児内容や状況としては、「安全などの社会的な生活習慣の範囲拡大」「子ども同士の喧嘩」「周囲への迷惑の可能性」などが挙げられており、上

記(2)で作成した複数の育児場面のシナリオ形式の尺度を概ね支持するものが確認された。

- (4) 育児感情のうち、特に肯定的感情から否定的感情への変化と複数の育児場面のシナリオとの関連を探るため、育児期の母親80人を対象に質問紙調査を行った。その結果、育児場面のうち、特に「食べ物の好き嫌い」「言葉遣い」「整理・整頓、衣服や身体などの清潔」「危険な遊び」「約束事を守らない」ことに対して、肯定的感情から「期待を裏切られた」「うんざりする」「イライラする」といった否定的感情へと転換しやすいことが明らかになった。

最後に、育児への感情を肯定的か、否定的かといった二者択一ではなく、肯定的感情と否定的感情の両者に着目し、相互転換の様相を実証しようとする点は、従来の研究では見られなかった本研究の独創的な点であるといえる。否定的から肯定的へ、肯定的から否定的へと転換する育児感情と実際の育児場面との関連を明らかにしたことで、育児への具体的な理解を深めるとともに育児を支援する際の有効な資料として活用できよう。また、肯定的感情から否定的感情へと変わり、それが過剰になった場合、児童虐待などのリスク要因となるため、感情転換の観点から得られた本研究の知見は、児童虐待を予防するための資料としても貢献できるものと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 高平紗梨菜・金 娟鏡	4. 巻 31
2. 論文標題 円滑な幼保小接続に向けた「生活科」授業の試案 - アニマシオンの手法から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 161-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 娟鏡・大園舞香	4. 巻 72
2. 論文標題 子どもの名づけに関する大学生調査からの示唆 - 家庭科「家族の一員」を具現化する手がかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 娟鏡・永迫彩花	4. 巻 71
2. 論文標題 青年期のための「子育て」ガイドブック作りへの提案－生活者としての視点を取り入れて－	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編	6. 最初と最後の頁 69-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yeonkyeong KIM
2. 発表標題 The effect of "Picture-Book Reading" in Childhood on Adolescent Japanese
3. 学会等名 American Psychological Association online for the APA 2020 Convention (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金 娟鏡
2. 発表標題 保育者の視点から捉えた保育現場の「子育て支援」の現状と課題について
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会（WEB開催）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 金 娟鏡
2. 発表標題 子どもへのしつけ言葉にみる親子の関わり - 次代の親となる者はどのような言葉をかけられ、どのような言葉をかけるか
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会（WEB開催）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 金 娟鏡	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 8
3. 書名 『子どもの発達を支える保育の心理学』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------